

『松江竹枝』 訳注 (二)

要 木 純 一

(19) 雨絲風片暗江城

滑滑泥途不可行

知是遠村先有雪

街頭処処売山鯨

雨絲 風片 江城暗く

滑滑たる 泥途は 行く可からず

知る是れ 遠村 先ず雪有るならん

街頭 処処 山鯨を売る

糸のような雨、やんだかと思うとまた吹く風、暗い松江の町。道はどろどろで、滑って歩くことも出来ない。遠くの村ではもう、雪が降り始めているに違いない。通りの至る所でイノシシの肉を売っている。

前半は、まさに初冬の松江の天候。松江に住んでいるものだけが実感できる。起句。「風片」、風のかげらとはよく分らないが、「片雨」、「片雲」等と同様、連続的でなくまた全面的でなく、断続的にまた局地的に、風が吹くことをいうのである。雨絲風片は、本来は春景を表す語。湯頭祖『牡丹亭・驚夢』「雨絲風片、煙波画船」。王士愼『秦淮雜詩』其一「十日雨絲風片の裏、濃春の煙景は残秋に似たり」。王士愼は明治時代よく読まれており、しかも南京の遊廓の「秦淮」を扱っているところから見ると、この詩の趣向を意識しているのかも知れない。「江城」は、本来川そばの町の意。「松江城」を縮めた言葉ではあるが、建物の松江城だけを指すのではない。唐、崔湜『襄陽早秋。岑侍郎に寄す』「江城秋氣早し」。元、王恽『滿江紅』其六「緑は江城に暗く洞府多し」。承句。「滑滑」は、ぬかるみ状態。范成大『不寐』「滑滑として舄を履むを病む」。「泥途（塗）」、「春秋左氏伝」襄公三十年「吾子をして辱く

も泥塗に在ら使むること久し矣」。低い地位等の含意をこめて用いられる場合が多いが、ここでは単にどろみちのこと。「不可行」、李白『横江詞』其五「此くの如き風波行く可からず」。転句。「遠村」、白居易『雞を贖う』「之を繋りて遠村より来る」。「先有雪」、孔平仲『登州太守の城を出づるを送る。馬上の作』「青嶂空に倚りて先ず雪有り」。結句。「街頭」、杜甫『偏側行』「街頭の酒僮常に貴きに苦しむ」。「処処」は、どこもかしこも。「ところどころ」ではない。孟浩然『春曉』「処処啼鳥を聞く」。「山鯨」は、日本語の「やまくじら」。獣肉を食べるのを忌んで、いのししをいいかえたもの。山地に雪が降ると、いのししが里におりてきて、肉の供給が増えるということであろう。

(20) 街上人呼河洛行
街上人がいにじやうは呼ぶひとよ河洛行からくこくぎやう

竈頭沸沸煖煙生
竈頭そうとう沸沸ふつとして煖煙だんえん生ず

硝灯影白往来断
硝灯しょうとう影かげ白くして往来断おうらいだ

風鐸霜寒夜半声
風鐸ふうだく霜寒しもさむし夜半やはんの声こゑ

通りで、客がそば屋を呼んでいる。かまどはぐらぐらと煮えたぎって、湯気がでている。他に行き来する人もいな
い道に、屋台のガラス灯が、白い光を投げかける。真夜中、屋台の風鈴に、霜が降って、いかにも寒そうな音をたて
ている。

起句。日本の蕎麦にあたる麵を、中国北方では「飴飴」（ホーラ）という。当て字として、「河洛」「河漏」を使う。
元、王禎の『農書』に、蕎麦について、「或いは湯餅を作り、之を河漏と謂う」とある。王士禎『池北偶談』「今齊魯
の間蕎麦を以て麵を作りて食う。河洛と名づく」。このような知識が、どこから日本に取り入れられ、そしてどのよ
うに流通していったか、不思議であるが、ともかく江戸時代には蕎麦のことを「河洛」「河漏」といつていた（『国』）。
大森惟中は「河洛」を「河漏」に変えるように指示している。「河洛」は詩文では、黄河、洛水を指すのが一般だか
らか、当時は「河漏」の方が使用頻度が高かったのか、或いは由緒正しい言葉のように思われていたのだろうか。

『国』の「河漏」という中国の地名によるという語源説は不審。「行」は、まちに行列のごとく並ぶことから店の意味で用いるが、その場合、平水韻では、下平七陽で、下平八庚の「生」「声」と韻があわない。「ゆく」の意ならば、下平八庚で韻が合うのだが、解釈が難しい。但し、宋詩以来、起句の韻をわざとはずす、鄰韻という作法があり、それを意識しているかも知れない。芸術として意味があるかどうかはさておき、日本漢詩では、無名の詩人であっても手の込んだレトリックを弄することが多い。承句。「竈頭」はこの二字でかまど。頭は助字。或いは、「江頭」同様、かまどのあたりと解釈すべきか。宋、徐積『山館に宿る』『飢兒先ず上ぐ竈頭燈』。王夫之『熱』「他の冷竈頭に禁う」。俗語らしく、中国の詩にはあまり古い用例がないが、かえって我が菅原道真が用いている。『雨夜』「況んや復た厨児訴う、竈頭爨煙断つと」(『国』)。「沸沸」、「山海經・西山經」其の源は沸沸湯湯。「沸」の漢音は「ヒ」であるが、慣用音に従った。「煖煙」、鄭谷『曲江春草』「花は江堤に落ち、煖烟を簇む」(「煖烟」は「煖煙」に同じ)。元、王惲『嚴州道中』「叢叢たる呉岫煖煙生ず」。但しこれらの用例中の「煙」はもや。転句。「硝子」は、もとは硝石(但し現在の所謂硝石以外の鉍石も含む)を用いて作ったガラス。(明、曹昭『格古要論』)。「硝灯」はガラスで囲った照明具。明治初期、おそらく西洋風物のそれに名付けた日本語。(『国』参照)「影」は光。「往来断」は日本語的発想か。結句。「風鐸」、江戸時代のそばの屋台は風鈴が取り付けてあり、「風鈴そば」と呼ばれたそうだ。(『国』)ここでは平仄の關係で「風鐸」を用いた。「風鐸」だと、寺の屋根にぶら下がる大きな物が思い浮かぶかもしれないが、形状からいえば、「風鈴」は「鈴」ではなく、小さな「風鐸」と呼ぶ方がむしろふさわしい。結句、張継『楓橋夜泊』「月落ち烏啼いて霜天に満つ」、「夜半の鐘声客船に到る」を意識するであろう。高尚な詩境を、卑俗化するおもしろさを狙っているようである。

この詩の大森惟中の評、

賤商入詩、才思沸沸。

賤商詩に入る、才思沸沸たり。

賤しい露天商を詩の題材にすると、それこそエスプリがぐらぐらと煮えたぎっているといえよう。「才思」は文才。『後漢書・文苑・禰衡』「並びに其の才思を極む」。白居易『首夏南池独酌』「境は勝るも才思は劣る」。「沸沸」

は原詩の表現を受けたしやれのつもりであろう。「賤商」は、商人一般が士農工商の最低に位置するという意味合いもあるが、ここでは、店を持たない露天商や屋台商を、商人の中でも更に低位のものとしておとしめていつてるのである。

(21) 絃管筵収伴後房

癡情擬字両鴛鴦

朱唇先試相思草

分与餘煙笑属郎

絃管の 筵は収められ 後房に伴う
げんかん むしろ おさ ちゅうぼう

癡情 字ばんと擬す 両鴛鴦
ちじよう まな ほつ りようえんおう

朱唇 先ず試みる 相思草
しゆしん まづ ことら せしそう

餘煙を 分与して 笑いて郎に属す
よえん ふんよ わら せうに ろうに ます

三味線や笛が鳴り響いた宴会も終わり、奥の部屋に客を連れていく。痴情の沙汰、二匹のおしどりの姿をまねようとする。女はまず世に思い草と呼ばれる煙草を（キセルに詰めて）紅い唇に咥えて吸う。それから、吸い残しを、男に笑いながらすすめる。

起句。「絃管」は、弦楽器と管楽器、凡そ音楽の総称。崔巨『春愁』「愁え来たりて弦管を理す」。「絃」、「弦」は古代より通用。「筵収」は、宴を行うむしろが片付けられて、宴が終わること。姚合『馬戴の下第して客遊するを送る』「人起ちて筵収めらるるも罇未だ空かず」。「後房」、後ろの方の部屋とは、本来妻妾の住む場所。ここでは妓女と寝るところ。『史記・魏其武安侯列伝』「後房の婦女百を以て数う」。承句。「癡情」、俗文学では、日本語の「癡（痴）情」とほぼ同様に使う。洪昇『長生殿』「只だ一点の那の癡情有り、愛河沈みて未だ醒めず」。「鴛鴦」は、男女特に夫婦の愛の象徴。庾信『人に代わりて往くを傷む』其一「相思樹下両鴛鴦」。転句。「朱唇」、宋玉『神女賦』「朱唇的として其れ丹の若し」。「相思草」は、其の名は早く任昉『述異記』に見えるが、ここは近世に流入した煙草の別名。清、沈穆『本草洞詮』「煙草は、一名相思草。言うところは、人之を食らえば、則ち時時思想し、離るる能わざる也」。煙草に対する愛を、男女の愛に掛けていることはいうまでもない。結句。「分与」、陸龜蒙『酒に中る』「愁えては応に

平子分与すべし」。「与」の後には、与えた相手（・・・に）が続くのが普通の言い方。釈齊己『人の紙を恵まるに謝す』「能く貝葉に書く僧に分与す」。こゝは、直接目的語（・・・を）の「餘煙」を配した。「餘（余）煙（烟）」は、本来は消えそうで消えないもや。顧況『歌いて独孤助を送る』「緑嶼餘煙に没す」。妓女が自分ののんだ煙草の残りを客に勧めることを分け与えるといったのであろう。日本の廓では、煙草のやりとりが、粹な風俗であつたように思うが、訳者はこの辺りの事情に疎い。中国ではどうだったろうか。「属」は、本来、酒をついで勧めること。『儀礼・士昏礼』「三たび尊に属（そそ）ぐ」。韓愈『八月十五夜張功曹に贈る』「一盃相い属む君当に飲むべし」。煙草はそそぐものではないが、流用したのであろう。

大森惟中の評、

初会情致如観、不知当夜烟量如何。

初会しよかいの情致じようち 観みるが如ごとし、知らず 当夜とうやの烟量えんりやう 如何いかばかりなるかを。

初会の様子が目の当たりに見えるようだ。その夜どのくらいの量のたばこをすつたことか。「初会」は、日本語。客が遊女を初めて尋ねること（『国』）。「情致」は、おもむき、興趣。劉義慶『世説新語・文学』「甚だ情致有り」。「如観」は、日本語の発想のように思う。「煙量」は、「酒量」などに擬えた造語であらう。

(22) 甕碗陶杯漫猷酬

俗人何解愛嬌喉

此間尤厭殺風景

醉漢頻爭豁指頭

甕碗じわん 陶杯とうはい 漫ろに猷酬けんしゆうす

俗人ぞくじん 何ぞ解かひせん 嬌喉きようこうを愛するを

此の間このかん 尤も厭いとう 殺風景さつふうけい

醉漢すいかん 頻りに争あらそひ 指頭しとうを豁かつす

気が乗らなくて、お酒もいい加減につきつがれつしているだけ。だって、つまらないやつらに私の美声のどこがよいかわかるもんですか。ここの無粋な雰囲気大っ嫌い。酔っぱらいは、大声出して争って拳を打っているし。

起句。「蓋（磁）碗」、「陶杯」は、あまり用例を見出せない。「磁碗」は、磁器のおわんには違いないが、明治に出来た言葉らしい。「国」。「陶杯」は、和語「すえつき」を漢語化したのではないか。多くの辞書では「陶坏」の二字を当てる。「陶杯」「陶製のさかづき」というだけでは、高級感もなく、詩語にふさわしくないが、和語の「すえつき」ならば、「かわらけ」等と同様、実際に使ったかどうかはともかく、酒宴といえ、つきものの飲食器。日本語では、古来、酒宴の象徴として用いられている。「国」参照）あまりこだわらず、沢山の酒杯が交わされたという程度の解釈でよいだろう。「献酬」、「詩経・小雅・楚茨」「献酬交錯も錯る」。「酬」は「酬」と同じ。陶潜『斜川に遊ぶ』「満を引きて更に献酬す」。承句。「俗人」、「荀子・儒効」「学問せず、正義無く、富利を以て隆しと為すは、是れ俗人なる者也」。「嬌喉」、高啓「教坊の旧妓郭芳卿の弟子陳氏の歌を聴く」「共に聴く嬌喉一鶯囀るを」。転句。「殺風景」、伝李商隐『義山雜纂』に「殺風景」の項目がある。蘇軾『林子中の春日新堤 事を書いて寄せ見るるに次韻す』「為に報ず年来殺風景」。結句。「醉漢」、劉克莊『三月二十五日方校書の園に飲む。十絶』其八「乍（むし）ろ生前に醉漢と称するも、也た死後愚公と謚するに勝らん」。「豁指頭」は、「豁拳」のこと。明、李日華『六研齋筆記』「俗に飲むとき手指の屈伸を以て相い博す、之を豁拳という」。宴会のゲーム。二人で、任意の数の指を突き出して、その和を当てあう。負けた方が罰杯を飲む。現代の中国でも、普通に行われて、大変な騒ぎである。「豁」は、手を開くという方向の動詞であるが、俗語なので当て字に過ぎない。現代漢語では「劃（划）」字を用いる。

大森惟中は眉批で、

争豁改挑拇如何。 「争豁」を「挑拇」に改むるは如何。

「争豁」を「挑拇」に改めてはどうか。結句を「醉漢 頻りに挑む 拇指頭」に変えよと勧めるが、不審。「挑拇指」は、拳を握ったまま親指をたてることで（この場合「挑」は上声で平仄が合わないが）相手をほめる動作。妓女を大げさにほめたたえるということか。あるいは、当時の廓では親指を用いた拳遊びがあったのか。（その場合は「いどむ」と訓ずるか）単に、「豁拳」の語を知らなかったというだけかもしれない。何か作者と評者との間に食い違いがありそうだ。

(23) 香夢驚醒客下樓 香夢 驚醒して 客樓を下る
 佳人相送說離愁 佳人 相い送りと 離愁を説く
 低聲更就耳辺語 低聲 更に 耳辺に就きて 語る
 果是明宵能到不 果して是れ 明宵 能く到るや不や

うまいの夢を見ていたのに、驚きさめて、客は妓樓を降つて帰っていく。美女が見送りに出て、別れるのが寂しいわという。そして、小声で耳元に囁くのだ。ほんとに、明日の晩もここにいらつしやれるわよね……。

起句。「香夢」、武元衡『春興』「春風一夜香夢を吹く」。「驚醒」、陳維崧『遙かに雲臣の秋夜雜劇を演ずるを觀るの作に和す』「夢遊びて驚醒して記し難し」。「下樓」、李白『魯の中都東樓にて酔いて起く』「樓を下る時を省せず」。承句。「佳人」、宋玉『登徒子好色賦』「天下の佳人は、楚国に若くは莫し」。「相送」は、「送」を二文字に引き伸ばした言い方。「相」は、「一緒に」ではなくて、送る送られるというように、相互關係が生じたときに用いられる。李白『金陵酒肆留別』「金陵の子弟来たりて相送る」。「離愁」、林逋『寄せて昌符に和す』「離愁写す可からず」。范成大『合江を発して数里。楊商卿諸公に寄す』「分かるるに臨んで意に滿ち離愁を説く」。転句。「低聲」、「ひくい」声というのは、人に聞かれぬようにしやべる小声のこと。朱慶餘『聞意』「粧い罷りて低聲もて夫婿に問う」。「耳辺」、杜甫『奉先劉少府の新たに画ける山水障の歌』「耳辺已に清猿を聞くに似たり」。結句。「果」は、暗に期待したとおりに意。期待するときは、実現に対して多く不安であるから、「いったいぜんたい」というような感じで後に疑問文が続くことが多い。「不」は、下平十一尤韻。もとは反復疑問文を作るが、肯定の答えを予想する疑問文に用いる。したがって、日本語の「か」とほぼ同様の用法である。

(24) 昨夜燈前約偕老 昨夜 燈前に 偕老を約す

無端好夢至巫山 端はしな無くも 好夢こうむ 巫山みざんに至る
 朝来頻被同儕艷 朝来ちようらい 頻しきりに 同儕どうさいに艶うらやまる
 織指新穿瑪瑙環 織指せんし 新あらたに穿うがつ 瑪瑙めうの環わ
 (自注) 瑪瑙、松江物産。
 瑪瑙は、松江まつえの物産ぶつさん。

昨夜彼氏と明かりの下で共白髪を誓い合い、思いがけず、一緒にあの巫山にまでいったかのようないい夢をみるこ
 とができた。そして、今朝、朋輩ともに会う毎に何遍もうらやましがられる。瑪瑙の指輪が私の細い指にはまってい
 るのを見つけられて。

起句。「偕老」、『詩経・邶風・擊鼓』また『鄭風・女曰鷄鳴』「子と偕に老いん」。後にもっぱら夫婦についてい
 ようになった。承句。「無端」は、端緒となる理由がないということから、意外、予想外な感じを表す。李商隱『錦
 瑟』「錦瑟端無くも五十鉉」。転句。「朝来」は、「朝」を二文字に引き伸ばしたもの。劉義慶『世説新語・簡傲』「西
 山朝来、爽氣有るを致す」。「同儕」は、『春秋左氏伝』僖公二十三年に「晋鄭は同儕なり」とある。後には同輩、仲
 間を広く指すようになった。「巫山」、楚の懷王が、夢で巫山（現四川省）の神女と契った故事から、男女の情交を
 「巫山の夢」という。（宋玉『高唐賦』）。「艶」は、美しいが本義だが、美しいとみなす意、すなわち羨む、慕う意に
 広がった。『淮南子・精神篇』「献公驪姫を艶む」。「艶とせらる」と訓じて、指輪をはめた姿が美しいとほめられると
 解釈してもよいかも知れない。結句。「織指」は、主に女性の細い指。嵇康『琴賦』「織指を飛ばして以て馳騫す」。
 李白『鳳笙篇』「更に嘆く別調織指に流るるを」。「新」は、（直前に）・・・したばかり。「穿」は、衣服などを、身
 につけること。穴をあけるが如く着用するからであらう。『世説新語・雅量』「幘几上に堕つ。頭を以て就いて穿取す」。
 「環」は、「指環（鑑）」。「晋書・大宛伝」「其の俗、婦を娶るに、先ず同心の指鑑を以て娉と為す」。国、時代を問わ
 ず、愛の誓いの証拠とされたようである。

自注。瑪瑙は松江の特産。瑪瑙は古代より出雲で生産された。正式な鉱物名は碧玉。ただし、現在の瑪瑙細工は江

戸末期から明治初期に復興されたものだという。（『島根県大百科事典』山陰中央新報社 一九八二）石の原産地は玉造だが、加工、販売は松江で行われたのであろう。曹丕に『瑪瑙勒賦』あり。「物産」、左思『吳都賦』「物産殷充す」。中国の地方志には必ず「物産」の項目あり。

大森惟中の眉批、

実況実叙。

じつぎょうじつじよ
実況実叙。

目の前で実際に起こったことをリアルに述べている。「実況」、実際の情況の意であろうが、古い用例が少ない。「実叙」は、詩の批評によく用いられる用語。例えば、仇兆鼈『杜詩詳注』『望嶽』の注に「上六は実叙、下二は虚摹」とあり、虚構的な、ファンタスティックな書き方に対して、現実をそのままに書くこと。廓に何遍も泊まった経験がなければ、ここまで妓女達の有様を如実には書けまい、という揶揄の気持ちが裏にありそうである。

(25) 傷郎至竟憶郎情

郎を傷むは 至竟 郎を憶う情
たが ねが いた おも じよう

只願莫違三世盟

只だ願う 違う莫れ 三世の盟いに
ただ ねが ちが さんせい ちか

私語未終天欲曉

私語 未だ終らざるに 天曉けんと欲す
しご いま おわ てん あ ほつ

生憎善導寺鐘声

生憎なり 善導 寺の鐘の声
あやにく ぜんどう じの かね こゑ

(自注) 善導寺、松江寺院之名。

善導寺は、松江の寺院の名なり。
ぜんどう じ まつえ じいん な

あなたを怨む気持ちには結局はあなたを慕う心から生まれているの。どうかお願い。三世の誓いをやぶっちゃだめよ。ひそかごとと終わらぬうちにはや明け方。にくつたらしいたらありやしない、善導寺の鐘の声。

起句。「傷」字不審。「あなた（の気持ち）」をきずつける。「あなたをかわいそうだと思う」等はそぐわない。「いたむ」と訓じて、心が傷つけられて、悲しく思う方向で解釈した。「至竟」は、「畢竟」に同じ。いろいろ経緯事情があつても結局のところ。杜牧『桃花夫人廟に題す』『至竟息亡ぶるは底事にか縁る』。「憶」は、思いやる。『子夜歌』

〔樂府詩集〕所収〕「郎を憶う須べからく寒服すべし」。承句。「三世盟」は、現在過去未来三世に渡る愛情のことで、日本語であろう。本当は、男女の愛は「二世」の誓いで、「三世」は、君臣間の誓いに該当するのだが、前世から来世に至る深い結びつきということで、かく言ったのであろう。多く「さんぜ」と読む。転句、「私語」といえば、白居易『長恨歌』「夜半人無く私語する時」。「天欲曉」、杜牧『閨情代作』「遙かに戍樓を望めば天曉けんと欲す」。結句、「生憎」は、口語的。盧照鄰『長安古意』。「生憎なり帳額に孤鸞を繡す」。結句は、リズムがくずれているようだが、白居易の『香鑪峯下、新たに山居を卜す。草堂初めて成る。偶ま東壁に題す』その『重題』其三「遺愛 寺鐘 欹枕 聽」。(遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く)に倣ったのであろう。張繼『楓橋夜泊』「夜半の鐘声客船に至る」。「善導寺」は、和多見町にある寺。当時の遊廓の南に位置する。現存。

咏声妓

原六十首

声妓せいぎを咏よむ 原六十首げんろくじゅうしゅ

ここからが、松江の妓女を題材にした作品となる。原本六十首あったうちの、二十六首を存する。殆どが、妓女達の名前を、詩の中に詠み込む趣向である。妓女一人一人の源氏名と読み(原本は傍訓だが、(一)のうちにカタカナで示した)を掲げ、その下に二行小字割注(ここでは一行にした)で、その本名、出生地、幾人かについては簡単な境遇を記している。竹枝詞の常として、嘲笑的、卑猥な気味は否定できないが、作者の年の若さにもよるのであろうか、概して妓女達の運命に同情的である。「声妓」は、歌に優れたものに限らず、芸者全般を指しているのであろう。蘇軾『韓魏公醉白堂記』「而して家に声妓の奉ずる有り」。

茂春(シケハル)

景山春女 伯州之産

茂春しげはる 景山春女かげやまはるじよ 伯州之産はくしゅうのさん

自註 角盤山在伯耆○春女曾与良人不適、竟棄兒而去焉。余不詳其假真。

自註じちゅう 角盤山かくばんさんは伯耆ほうきに在り○

春女は曾て良人と適せず、竟に児を棄てて而して去る焉。余其の假真を詳らかにせず。

(26) 鍾情昨弄掌中珠

一去当年思到無

夜半頻啼呼子鳥

角盤山上月痕孤

情を鍾めて 昨に弄す 掌中の珠

一たび去りて 当年 思い到る無きや

夜半 頻りに啼く 呼子鳥

角盤 山上 月痕孤なり

「鍾」はもと「鐘」に作るが、大森惟中の朱に従つて改める。二字は古代においてしばしば通用するが、單なる筆の誤りであろう。

源氏名には、濁点はない。書き下し文では、濁点をつけ、本名については、こうも読むであろうかという一案を示した。「・・・女」は、「千代女」のごとく、日本において女性の名を丁寧に示す接尾辞。〔国〕伯耆は伯耆（鳥取県西部）のこと。人に対して、どここの土地の生まれかを示すときに、「・・・之産」というのは、日本語の用法である。夏目漱石『坊っちゃん』「君は一体どここの産だ」。

自註。角盤山（大山）は、伯耆の国にある。春は、かつて夫との間がうまくいかず、なんと子供を捨てて去つたという。真偽の程は私にはわからない。

「角盤山」は伯耆大山の別名。四角の岩が天より降つてきて、今の大山になったという伝説がある。（『大山寺縁起』）「盤」は「磐」に通じるか。あるいは碁盤の形状か。「良人」は、妻から夫を指す言葉。『孟子』「其の良人出づれば、必ず酒肉に饜きて而して後に反る」。「竟」は、そのような結果になることだが、当初の思惑と違つた、意外で驚くべき結末が次に続くことが多い。「なんとまあ」という語感。「焉」は、「於是」と同じ、「ここに」と読んでもよい。漠然と前を受けて、「そういうわけで」「かくして」。「假（仮）」はにせもの、うそ。白居易『古冢狐』「彼は真にして此は假なるも俱に人を迷わしむ」。虚実を追究せぬのが廓遊びの粹ということなのである。

詩。有りたつかけの愛情を注いで、掌中の珠に比すべき可愛い我が子と遊んだのは昨日のことのよう。私が家を去つ

た後、あの頃のことを我が子は思い出してくれるだろうか。ふるさと伯耆では夜頻りにその名も呼子鳥が鳴いていることだろう。そして、大山の上空に、三日月がひっそりと懸かっていることであろう。

起句。「鍾情」、劉義慶『世說新語・傷逝』の王戎の言「情の鍾まる所は、正に我が輩に在り」。後、「鍾愛」と同様に用いる。陸游『暮春』「飛絮情を鍾めて独り春に殿す」。「昨」は漠然と以前をさす。しかし、ここでは昨日の如くのような気持ちちをこめているとみた。「弄」は、本来手で撫でながら賞翫すること。珠ならもてあそぶ、子供ならばかわいがる。「掌中珠」、傳玄『短歌行』「昔君我を視ること、掌中の珠の如し」。後、多く子に対する溺愛の譬喩として用いる。王宏『從軍行』「児生まれて三日掌上の珠」。承句。「一去」、『史記・刺客列伝』所謂荊軻の易水歌「壯士一たび去つて兮復たと還らず」、陶淵明『園田の居に帰る』「一たび去りてより三十年」等を意識するであろう。「思到」は、「いたるをおもう」の用例はあるが、「おもいいたる」意で詩語として用いることはあまりない。「想到」なら、劉禹錫『李戸部侍郎河南尹自り再び本官に除せられ闕に帰るを送る』に「想到す金門籍を通ずるを待ちて、一時驚喜して風儀を見んことを」。「無」は、英語の反復疑問文に当たる言い方。現代漢語の「嗎」の祖型、したがって「・・・であるか」と單純疑問文として訳してもかまわない。転句。「呼子鳥」は日本語。『万葉集』高市黑人「大和には鳴きてか来らむ呼兒鳥象の中山呼びそ越ゆなる」。鳴き声の正体は、郭公、杜鵑、猿等諸説ある。『国』いずれにせよ、「子を呼ぶ」の名に、子を思ふ気持ちを掛けて用いた。結句。「月痕」は、中国では、月の光線の痕跡、すなわち地上に反映した月光を言うようであるが、ここは、山上にあるのだから、三日月を天につけられた傷痕とみなしたと考えたい。陸游『江上散步して梅を尋ぬ。偶ま得たり』「漠漠幽香月痕を伴う」。元、劉銑『再び前韻を用いて周景叔に酬ゆ』「海棠池館月痕孤なり」。

好 (ヨシ) 山根与志女

好 (よし) 山根与志女

(27) 唱出嬌喉艶治歌

唱 (うた) いて 嬌 (きょう) 喉 (こう) より 出 (い) ず 艶 (えん) 治 (ち) なる 歌 (うた)

評声品色果如何

声 (こゑ) を 評 (ひやう) し 色 (いろ) を 品 (ひん) す れば 果 (はた) して 如 (い) 何 (かん)

名呼好好連呼耳
司馬先生到處多

名もて 好好と呼べば、連呼する耳
司馬先生 到處に多し

この女、可愛い柔らかな調子で、色っぽい歌を歌う。さーてじっくりとその声、きりようを品定めするなら、いったいどのくらいのランクにつけられようか。何せ名前が「よし」なので、みんな何遍も「よし」「よし」と呼んでいるだけのこと。どこに行っても、何でも「よし」の司馬徽のような人ばかりだから。そのまま「よし」と評価するわけにはいさかねる。

起句は「嬌喉唱出艶冶歌」とあるべきところを、平仄の關係で入れ替えた。「嬌喉」、元、許有孚『圭塘雜咏・柳下に鶯を聴く』『其れ奈かんせん嬌喉百轉新たなるを』。「嬌」は優美な感じとお茶目な雰囲気の両方を兼ねて見えた。「艶冶」は、主に妓女の視覚的な美しさをいう。庾肩吾『長安に狭斜有りの行』『少婦艶冶多し』。ここでは聴覚に応用した。承句。「評声品色」は、嫖客が芸者をじっくりと嬌めつ眇めつ見定めることを言うのであろう。恐らく作者の造語。「品色」は、元來侍衛官の官品に應じて彩色した儀礼用の服（『周書・宣帝紀』）であるが、この「品」は、どのレベル（品）に入れるか考える（品評）という動詞で、「評」と同意に用いている。歐陽修『南省試策』之一「中正を立てて以て功伐の高下を品する有り」。転句。俗語で、何でもいい加減に「好し」という、事なかれ主義の人を「好好先生」という。（『儒林外史』六「怎的落得做好好先生」）。結句と相俟つてこれを意識するか。「名呼好好」は、「名は好と呼ばれている」の意も兼ねているかも知れない。「連呼」、『後漢書』劉玄伝「諸婦女後に従いて連呼して曰く陛下」。漢語としての「呼」は、さげふ気味が強いが、ここでは名前を呼びかけるといふ程度で用いている。結句。「司馬先生」は、司馬徽。字は德操。三国蜀の人。劉備に諸葛孔明や龐統を薦めた。彼は、人の欠点をあげつらわず、何でも「好し」と言った。人の子が死んでも「大いに好し」と言ったので、それを妻にとがめられても、「卿の言も亦た好し」といったという。原典が何なのか詳らかにしないが、『蒙求』に「司馬称好」として収められておりその注にこの故事がまとめられている。「到處」、杜甫『韋左丞丈に贈り奉る二十二韻』「到る処悲辛を潜む」。

大森惟中の眉批、

司馬作水鑑如何。

「司馬」は、「水鑑」に作るは如何

「司馬」は「水鑑」に変えたらどうだろう。司馬徽が「水鏡」と呼ばれたことは『三国志』龐統伝の注に既に載っているが、『三国志演義』第三十七回にはさらに「水鏡先生」が彼の道号として見える。「鑑」は「鏡」に同じ。とくに宋代、「鏡」（漢音ケイ）が帝室の先祖の名「敬」（ケイ）の音を犯すために、代わりに用いられる。「司馬先生」では他の「司馬」氏と紛れ易く、「水鏡先生」の方が人口に膾炙しているので、かく改めよというのであろうか。「司馬称好」は有名な故事成語なので原案のままでよいと思うのだが。

(28) 婀娜纖腰擎者誰

閨情宴樂両相宜

縱饒弱柳無任俠

畢竟東風逗此枝

婀娜なる 纖腰 擎ぐる者は誰ぞ

閨情 宴樂 両つながら相い宜し

縱し饒い弱柳 任俠無きも

畢竟 東風 此の枝に逗まらん

あだつばい、細い腰をささげもつ果報者は誰だ。閨の愛も、うたげの楽しみも、どっちもすばらしい。なよなよとした柳のような女、無論、男のような任侠なんて要求はできませんが、それでも「よし」さ。春風のようないいお客がその柳腰の上に結局は立ち寄ってくれるだろうから。

起句。「婀娜」、曹植『洛神賦』「華容婀娜、我をして餐を忘れ令む」。「纖腰」、庾信『擬詠懷』其六「纖腰束素を減ず」。「……者は誰ぞ」という、自問自答の趣向の句は多い。杜甫『述古』其一「為に問う馭する者は誰ぞ」。承句。

「閨情」は、妻の夫への愛を指すもので、曹植や李白に「閨情」と題する詩があるが、ここでは妓女との情交に転用している。「宴樂」は、「閨情」と対なので、「えんらく」であって、「えんがく」すなわち「燕楽」の意ではあるまい。『左伝・文公四年』「王之に宴樂せしむ」。承句は、蘇軾『湖上に飲む。初め晴れて後に雨ふる』其一「淡粧濃抹総て

相い宜し」を明らかに意識する。また同じく蘇軾『孔周翰に和す。二絶』其二「幽人蝸舍両つながら相い宜し」。「宜」字の左に「好（よし）」の名を詠み込んだところとして二重丸が施されているので、「よろし」ではなく「よし」と訓ずる。転句。「縦饒」は、「たとえ・・・であつても」。「縦」字の左にも二重丸を附しているので、「よし」と訓じた。羅隱『汴河』「柳色縦し饒い故国を枉うも、水声何ぞ忍びん揚州に到るを」。「弱柳」、張正見『賦して垂柳斜溪に映ずを得』「三陽弱柳垂る」。やがて、妓女の姿態に喩えるようになった。賈至『春思』其の二「紅粉壚に当たりて弱柳のごとく垂る」。「任侠」、「史記」季布列伝「氣を為すこと任侠」。妓女を詠む詩に使うのは異様な感じがする。女に実が無く、柳が風になびくように浮気性なことを皮肉っているのだろうか。或いは「任」（たえる）字に重点があつて、些細な風にもたえられないような、女の見かけの弱々しさをいつているのかも知れない。結句。「畢竟」は、とどのつまり。王維『哭殷遙』「畢竟無形に帰る」。「東風」は、普通は春風。『礼記・月令』「孟春の月・・・東風凍を解く」。「逗」字、よくわからぬ。「逗留」の意にとつたが、「いたる」、「さそう（からかう）」の気持ちかも知れぬ。歐陽修『春日詞』其一「玉瑄東風曉に逗（いた）りて来る」。関係があるかどうか。柳と風を、妓女と客に対応させているには、違いあるまい。作者の意図を充分に把握できぬが、おそらくはこの妓女とかなり親しくて、憎まれ口をわざとたたいて、からかった作品なのであろう。

愛次 田原猶女 大阪之産 愛次 田原猶女 大阪之産

(29) 昨夜海棠微雨過 昨夜 海棠 微雨過ぐ

一顰一笑意如何 一顰 一笑 意は如何

沈淪情況君休説 沈淪の 情況 君説くを休めよ

自古佳人薄命多 古え自り 佳人 薄命多し

(寝物語) きのうのよる海棠に小雨がさつと降っていった。お前の風情もそんな感じ。しかめ面したり、笑ったり、

いったい何を考えているのか。落ちぶれて、苦界に沈んだお前の哀れな身の上、どうか、もうこれ以上話さないでおくれ。(かわいそうでとても聞いてはおられない) いうまでもなく、むかしから、遊女は薄命にきまつているもの。

起句。「海棠」は、落葉小高木。四月頃淡紅色の花を咲かせる。秋海棠とは別種。楊貴妃の美しさに喩えられる。

『楊貴妃伝』「此れ真に海棠睡りて未だ足らず耶」。それに雨が降るといのは、白居易『長恨歌』「梨花一枝春雨を帶ぶ」が念頭にあるのではないか。ただ、『長恨歌』と違って、女の愁いを帯びた美しさの心象であろう。男女の交わりをも指すか。『微雨過』、鄭谷『益州』「何事ぞ晚來微雨過ぐ」。承句。「一顰一笑」、権徳興『雜興』其一「一顰一笑千金のごとく重し」。「意如何」、杜甫『天末に李白を懷う』「君子意は如何」。転句。「沈淪」、劉向『九歎』「或いは沈淪して其れ達する所無し」。「情況」、范仲淹『葛閣寺丞の接花歌に和す』「北人の情況は南人に異なる」。「君休説」、白居易『談客に贈る』「君に請う説くを休めよ長安の事」。結句は、蘇軾『薄命佳人』「自古佳人多命薄」をほぼそのまま用いる。「多」字は、「有」「無」同様、名詞や事象の前に来るのが原則だが、詩においては、しばしば倒置する。ここでも倒置して「多」字で押韻させている。

後半は、男に対して、女が、「つらい身の上のことにこれ以上触れて下さるな」と返答したと解釈すべきかも知れないが、結句で自らを佳人というのは違和感がある。蘇軾もそういつているじゃないの、という感じだろうか。

花梅 (ハナムメ)

中山阿照

花梅 はなうめ 中山阿照 なかやまおてる

(30) 夜夜劉郎踏雪來

夜夜 やや 劉郎 りゅうろう 雪を踏みて來る ゆきをふみてきた

狭斜場枕碧江隈

狭斜 きょうしゃ 場は枕す じょうはまくら 碧江の隈 へきかう

清香艷色有人識

清香 せいこう 艷色 えんしき 人の識る有り ひとしあ

臘裏占春花是梅

臘裏 ろうり 春を占むる はるをうめ 花は是れ梅なり はなはこれうめなり

女性の名前の最初によくつける「お」に「阿」を当てはめている。「阿Q正伝」の「阿Q」のごとく、中国では、

「阿」字は男女関わりなく呼び名に用いる。

毎晩、彼氏が雪を踏みしめながら尋ねてくる。この遊廓は、緑色の河が曲がったところに臨んでいる。清らかな香り、あだつばい姿といやあ知る人ぞ知る。年の暮れに春を独り占めする花が梅であるように、何てったって花梅姉さんに決まってるよ。

起句。「劉郎」、劉義慶『幽明録』によれば、後漢永平年間、劉晨は阮肇とともに、天台山に菓を採りに行って道に迷い、仙女に会った。半年後家に帰るとすでに晋代、七世の孫の代になっていたという。後、二人は再び天台山を訪れて、行方知らずになった。司空圖『遊仙』其二「劉郎相約する事は諧い難し」。この故事を、姓を同じくする劉禹錫が自分自身に当てはめて作った「再び玄都觀に遊ぶ。絶句」「前度劉郎今又来る」をも意識するだろう。「踏雪」、出典は詳らかにしないが、「孟浩然雪を踏みて梅を尋ぬ」という民間故事がいつごろから発生して、文人が苦勞して自然を詩に詠む例として使われる。『元曲選・貶黃州』「生扭做踏雪尋梅孟浩然」。ここでは、男が、木の「梅」ならぬ芸者の「花梅」を鑑賞に来たわけだ。承句。「狭斜」は、都會の狭くて斜めに走る裏道のことで、妓院が多く並んでいるところ。古樂府に『長安有狭斜行』がある。沈約『麗人賦』「狭斜の才女、銅街の麗人」。「狭斜場」と三字にしてわざと破格にしている。狭い小道の「狭斜」が、ある程度の広さを持つ平面を意味する「場」と合体することは本来おかしい。「狭斜」を遊廓全体（和多見町）のつもりで使っているのだろう。「枕」は水などを見下ろすこと、面すること。『漢書・嚴助伝』（会稽は）北のかた大江に枕す。『碧江隈』、李中『九江の旧居を思う』其一「茅を結びて曾て在り碧江の隈」。「隈」は水が岸に曲がり込んだところ。現在、和多見町の当たりで大橋川が曲がっている印象はないが、宍道湖が西方からぐっと狭まって大橋川に変わるあたりは、「隈」とみえなくもないか。当時の地勢はどうであつたらう。転句。梅といえば「清香」。林逋『梅花』其二「天清香を与えたるは私有るに似たり」。「艷色」、なまめかしい女性の姿。李白『早秋。裴十七仲堪に贈る』「復た両少女を携え、艷色荷花を驚かす」。植物にも使う。杜甫『寒雨、朝行きて園樹を視る』「梔子紅椒艷色殊なり」。「有人識」、任華『李白に寄す』「但だ任華を訪ねれば人の識る有らん」。「見知っている人がいよう」ということだが、「知る人は知っている」とか、「他の誰であろう」とい

うような、強い（江戸っ子調の）語気がこめられているような気がする。結句は、徳川斉昭（水戸烈公）の有名な梅の詩、『弘道館に梅花を賞す』『雪裡に春を占む天下の魁』を明らかに踏まえている。さらには同詩「清香馥郁として十分に開く」も、この詩の転句において意識しているかもしれない。「占春」、韓愈『太平公主の山荘に遊ぶ』『公主当年春を占めんと欲す』。ここでは、歳末、他に花がないなか、ひとり梅のみが咲いて、称賛を擅にすることをいうのであろう。無論、花梅が妓女の中で一番だという含意がある。「臘」は、元来、歳末の祭りの名。旧暦十二月、あるいは冬全般を指す。「臘裏」は、「臘」の「裏（うち）」ということで、二字で熟語的に用いられる。さらに、「臘裏春」という成語もある。黄庭堅『張祕校の雪を喜ぶに次韻す』『臘裏の春初未だ年を隔てず』。暦の關係で春（立春）が歳末にすでに来ることをいう。（年の内に春は来にけり、である）結句は、以上の如く先人の句を換骨奪胎したものである。「臘裏占春」という長い修飾語が「花」にかかるのも、和文的で面白い。

朝霧（アサキリ）

松江阿千代

朝霧 あさぎり 松江阿千代 まつえ おちよ

朝霧時病眼、故及。

朝霧時 あさぎりとき に眼 め を病 や む、故 ゆゑ に及 およ ぶ。

(31) 三生石上結良縁

三生 さんしやう 石上 せきじやう に 良縁 りやうえん を結 むす び

互約後宵契已堅

互 たが いに後宵 こうしやう を約 やく して 契 ちぎ り已 すで に堅 かた し

咫尺情郎看不見

咫 しせき 尺 じやうちう 情郎 じやうらう 看 み れども見 み えず

朦朧朝霧罩簾前

朦朧 もうろう たる 朝霧 あさぎり は 簾前 れんぜん を罩 おほ う

「松江」は姓ではなく、出身地を示すのではないか。或いは通称か。

注。朝霧はこの時目を病んでいたので、詩の中でこのようにいつているのである。

温庭筠『雪』其一「謝莊は今眼を病む」。「故及」は詩でなぜそのように言及したのか、理由を指し示す言葉。

『九家注杜詩』の「不寐」の注「公（杜甫）南下せんと欲す。故に之に及ぶ」。「及」の後に何らかの目的語を伴うの

が普通の言い方だが。

詩。三生石で、三世を誓った私達、明日の夜にまた会おうと約束した、そのちぎりは揺るぎようもなく固い。けど、ごく間近でも、あなたの顔が見えない。ばんやりと朝霧のようなものが簾の前にかかっている。

起句。「三生石」は、袁郊『甘沢謠・円観』の故事による。唐代、李源という人が、友人の僧の円観と三峽に遊んだ。円観はたまたまその場にいた妊婦を指さして、その胎内に生まれ変わることを予言し、十二年後の中秋の夜に、杭州天竺寺の外で李源に会うことを約した。その夜、妊婦は出産し、円観は死ぬ。後に約束通り、李源は、円観が転生した牧童に出会う。牧童が「三生石上旧精魂」云々という竹枝詞を歌っていたのでそれとわかったのである。この話の竹枝詞にこじつけて、天竺寺の裏山の三生石が、二人の会った場所だという伝説が生まれた。石は現在も残っている。詩ではしばしば、浅からぬ宿縁の典拠として用いられる。齊己『荊渚感懷、僧達禪弟に贈る』其三「自ら抛つ南岳の三生石」。「三生」は、前生、今生、来生を指す。漢音で「さんせい」と読んでもよいが、仏教語なので呉音に従った。「良縁」、陸機『迢迢たる牽牛星に擬う』「跂するも彼良縁無し」。皮日休『江南道中。茅山広文南陽博士に酬ゆ』其二「君に望む惟だ欲す良縁を結ばんことを」。日本語同様、男女の間についてしばしば用いられる。承句。「後宵」、詩語としてあまり見ない。思うに、日本語の「後朝（きぬぎぬ）の別れ」、「後朝の使い」などをヒントにした作者の造語ではあるまいか。逢瀬の翌日の夜もあうと約束したというこでよいだろう。あるいは平仄の関係で「後夜」の代わりに用いたとしたら、夜半から明け方のことで、少し変則的に「互いに後宵の契りを約して已に堅し」と読むことになる。「契」を男女の誓いの意に用いるのは、日本語の用法。まして、「契」は石などに刻みつけることが本義で、それが「堅」というのは理屈に合わない。押韻を度外視すれば「深」とでもあるべきところ。完全に日本語的発想であろう。但し、作者自身は、そのちぐはぐさを楽しんでいるようではある。転句。「咫尺」は、周代の制度では、八寸が「咫」、十寸が「尺」。短い距離。『左伝・僖公九年』「天威は顔を違ふこと咫尺ならず」。近くですら見えないことを示す「咫尺も辨ぜず」は、明確な出典は明らかにしえないが、日本語の成語としてよく使う。宋、司馬樞『千頃山に遊ぶ』「恍として咫尺も辨ぜず」。「情郎」、韓偓『花の落つるを厭う』「猶お疑う未だ情郎の意に満た

ざるを」。「看不見」、張若虛『春江花月夜』『汀上の白沙は看れども見えず』。李白『内に別れて徴に赴く』其一「白玉高楼看れども見えず」。「看」は意識的にみること。「見」は対象がみえること。全然みる気も起こらないというのではなくて、みようとすることがみえないというじれったい感じ。また、『大学』『之を視れども而して見えず（弗）、之を聴けども而して聞こえず（弗）』も念頭にあらう。結局は、捨てられた女の怨みを詠った王昌齡『西宮春怨』の「朦朧たる樹色昭陽を隠す」を意識しているだらう。「朝霧」、梅堯臣『三女岡』『奄藹として朝霧平らかなり』。「罩」はつつみこむようにおおう感じ。李洞『公子家』『瑞煙軽く罩う一園の春』。霧は「立ちこめる」ので、「簾前にこむ」と訓ずるべきか。「簾前」、劉禹錫『令狐相公見示……』『簾前小雪を疑う』。中国の簾は、屋内と屋外を隔てるが、ここも男と別れる庭や縁側、或いは出口をイメージすべきか。それとも、屋内の簾とみて、閨の中をイメージすべきか。

大森惟中の眉批、

宛然須磨卷光景。

宛然として須磨の巻の光景のごとし。

源氏物語の須磨の巻の有名な場面にそっくりだ。「宛然」は「彷彿」と同様の語。李白『崔秋浦に贈る』『宛然として陶令の風のごとし』。「須磨の巻の光景に宛然たり」と訓じてよい。「光景」は、もと光と影、転じて自然の景色。あるいは情景。蕭綱『艷歌篇十八韻』『凌晨光景麗らかなり』。ところで、大森惟中は、「須磨の巻」を思い出すというのだが、須磨の巻に目立った霧の描写はない。源氏で、咫尺も辨ぜぬような霧といえ、夕霧の巻の方が印象的というべきであらう。大森惟中の単なる勘違いか。疑いを存しておく。

花扇（ハナアフキ）

太田阿満 松江藩士女

花扇 太田阿満 松江藩士の女

(32) 繡閣談諧逸興多

唱来一曲八杉歌

芳心持贈画花扇

繡閣 談諧 逸興多く
唱い来る 一曲 八杉の歌

芳心 持して 花を画く扇を 贈らるるも

不是情人可奈何

是れ 情人ならずんば 奈何とかす可き

「花扇」とは、実は普通の扇のことではなく、七種の草花を束ね檀紙で包み、水引で扇形に装飾したもので、近世、七夕に、陽明家（近衛家）から宮中に献上した、由緒あるもの。呉音読みで、「けせん」ともいう。（『国』）但し、妓女本人の名の由来はそうかもしれないが、この詩、及び評では、やはり芸者のもつ扇をイメージすべきであろう。45
力長にも、「松江藩士女」の注が附してある。侍が没落して、娘を遊女にせざるを得なかったのであらう。花をえがいた扇は中国でもごく一般的な物。陸游『農事稍や閑にして作有り』「西舍婦を迎えて花扇紅なり」。

詩。女は、部屋で、ユーモアたっぷりの話をしてくれる、なかなかおとな趣向。それではと、安来節を一曲歌い始めた。女がいう。ご好意で、花を描いた扇を贈って下さるのはかたじけなく思いますが、私の意中の人ではございませんのでどうしようもありません。ごめん遊ばせ。

起句。「繡閣」は装飾を凝らした女性の部屋。欧陽炯『菩薩蛮』其四「画屏繡閣三秋雨」。「談諧」はユーモアのある話しぶり。『漢書・東方朔伝』「頗る復た談諧」。杜甫『社日』其一「尚お想う東方朔、談諧肉を割きて帰るを」。「逸興」は、俗世を超脱した豪放な楽しみ。王勃『滕王閣序』「逸興遄やかに飛ぶ」。ここは豪放というよりも、洒脱で、粹な気分を帯びているようだ。承句。「八杉歌」は、平仄にあわせるための当て字。作者の造語で、一般に広く使われていたとは思えない。転句。「芳心」は、李白『古風』其四十九「美人は」芳心空しく自ら持す」のように、主に女らしい気持ち指すが、ここは、「芳意」、「芳信」のように、他人の好意に対する敬意を示すのだろう。つまり、この句は男が女に扇を贈ったのに感謝していると解釈する。「持贈」は、（扇を）手に持って贈ることであるが、熟語の如く詩に用いられる。欧陽修『葉を乞う。梅聖俞に呈す』「謂えらく此の吾が家の物を、誰に問いてか持ちて君に贈らんと」。結句。「情人」は恋人、『子夜四時歌』「情人還りて臥さず」。「可奈何」といえば、『史記・項羽本紀』「雖逝かず兮奈何す可き」。扇を贈った男の求愛をすげなく拒む言葉と解釈した。或いは、恋人からの贈り物ならうれしいのだけど、という独白か。扇を女が男に贈るという逆のシチュエーションならば、後半は、扇を贈ってもらった

が、俺はどうせお前の思い人ではないから何の意味もないことだという男のぼやきということになるのか。

大森惟中の評、

扇上所画、無乃朝顔花。

扇上に画く所、乃ち朝顔の花無からんや。

扇に描いてある絵は、朝顔の花じゃないかな。『生写朝顔話（しよううつしあさがおばなし）』、別名『朝顔日記』は、もと浄瑠璃で歌舞伎にもなった、宮城阿曾次郎（後に駒沢次郎左衛門）と深雪（後に朝顔）の恋物語であるが、その中で、阿曾次郎が深雪の扇に朝顔（及び朝顔の歌）を描いて渡す場面がある。この扇が何遍もあらわれ、二人の間を往き来する。深雪（朝顔）は家老の娘で、花扇と同じく侍の娘で没落していることに注意。島根大学法文学部田中則雄教授（日本近世文学）にご教示頂いた。記して感謝の意を表す。「無乃」で、「・・・ではあるまいか」という婉曲な反語。『論語・雍也』「簡に居て而して簡を行うことは、乃ち大簡なること無からん乎」「朝顔」は日本語、中国語では「牽牛花」等。近代になって、日本語の影響で、彼の国でもまれに「朝顔」ということもあるようである。

玉鶴（タマツル）

安龍寺阿常

玉鶴 安龍寺阿常

(33) 九天高舞意悠悠

九天 高く舞い 意は悠悠たり

一曲清歌弄玉喉

一曲の 清歌 玉喉を弄す

仙客騎遊何処是

仙客 騎りて遊ぶは 何れの処か是れなる

碧雲湖上小揚州

碧雲 湖上 小揚州

「安龍寺」が、姓なのか、それとも何か由来があるのか詳らかにしない。「鶴」字自体は詩の中にあらわれないが、どの句も鶴を意識して作られている。

気持ちをゆったりと保って、悠然として空高く舞う鶴よ。美しい歌がその喉から絞り出される。この鶴に乗って旅する仙人はどこに遊ぶかという、六道湖湖畔のこの「小揚州」とも言うべき、遊廓なのであった。

起句。「九天」、「九」の内容については諸説有るが、要するに天上世界の一番高いところ。『孫子・形篇』「善く攻むる者は、九天の上に動く」。李白『廬山の瀑布を望む』其二「疑うらくは是れ銀河九天より落つるか」と。「高舞」は、詩語としてあまり用いないようである。「空高く舞う」という日本語を本にした造語か。「悠悠」は、見ているものの気持ちや世の中と関係なく、自ら確乎として存在したり、動いたりしている感じ。文脈によって、はるか、とりとめもない、のんびり等の訳が考えられる。高適『封丘県』「一生自ずからはれ悠悠たる者なり」。柳宗元『柳州峨山に登る』「独歩して意は悠悠」。承句。「清歌」は、もともととは楽器を伴わぬ歌。張衡『思立賦』「並びに詩を詠つて而して清歌す」。ここは、単に清らかな歌の意でよいであろう。葛洪『抱朴子・知止』「清歌妙舞」。「玉喉」は、美しい歌声を出す喉。李賀『洛姝真珠』「玉喉窈窕として空光を排す」。「弄」は万能動詞として字を埋めただけかもしれないが、楽器を演奏するときしばしば用いるので応用したとも考えられる。『史記・司馬相如伝』「卓氏に飲むに及んで、琴を弄す」。転句。「仙客」といえば、石川丈山『富士山』「仙客来り遊ぶ雲外の巔」が念頭にあったであろう。古来鶴は仙人の乗り物とみなされたことから、「仙客」は鶴を表すことも多い。元、郭若虚『図画見聞志・五客図』「鶴は仙客と曰う」。ただし、この仙客はあくまでも嫖客であって、それが「騎る」対象が鶴なのである。恐らく卑猥の意をこめていよう。転句及び結句は「鶴に騎つて揚州に上る」の故事を本にしている。殷芸『小説』「客有り相い従いて、各の其の志す所を述ぶ。或いは揚州刺史に為らんことを願ひ、或いは賞材を多くせんことを願ひ、或いは鶴に騎りて上升せんことを願う。其の一人曰く、『腰に十万貫を纏ひ、鶴に騎りて揚州に上らん』と。三者を兼ねんと欲す」。その揚州は、南京の遊廓街秦淮に擬えて、小秦淮と呼ばれる妓楼立ち並ぶ街であった。「何処是」、崔灝『黃鶴楼』「日暮郷関何れの処か是なる」。その冒頭に「昔人已に黃鶴に乗りて去る」とあるのも鶴と仙人との縁がある。「碧雲湖」は六道湖の雅名。1で既述。揚州が小秦淮で、さらに松江の和多見町が小揚州という見立て。これも1で既述。後半、典故を重層的に用いて、なかなか手が込んでいる。

初君（ハツキミ）

糸賀阿末

初君 はつきみ
糸賀阿末 いとが おすえ

(34) 千紅万紫本紛紛

一片芳心初見君

今夜情郎猶未到

花傷風雨月傷雲

千紅^{せんこう} 万紫^{ばんし} 本より紛紛^{ほんよりふんぷん}たり
 一片^{いつぺん}の 芳心^{ほうしん} 初^{はじ}めて君^{きみ}に見ゆ
 今夜^{こんや} 情郎^{じやうろう} 猶^なお未^{いま}だ到^{いた}らず
 花^{はな}は 風雨^{ふうう}を 傷^{つき}み 月^{つき}は雲^{くも}を傷^{いた}む

「初君」は、新年初めて妓女を買うこと（『国』）だが、それを知った上での命名かどうか。本名の「末」に対して、逆の源氏名をつけて、若さ、新鮮さを強調しただけだろう。

妓楼にはもとより、あか、むらさきの色とりどりの妓女が沢山。その中から、有り難いお気持ちで私を選んで下さり、この前はじめてあなたにお会いできたわけです。それなのに、今夜恋しいあなたはまだ来ない。花が風雨を悲しみ、月が雲を悲しむように、二人のこれからはどうなることやら心配でたまりませぬ。

起句。「千紅万紫」は、百花乱れる様。辛棄疾『水龍吟・寄せて京口の范南伯知県の文官花に寄す』。「人間意を得たる、千紅万紫、頭を転ずれば春尽きん」。「本」は、もともと、当然のこととして、というニュアンスか。「紛紛」は、ごちゃごちゃと多い様。陶潜『農を勧む』其三「紛紛たる士女、時に趨いて競い逐う」。承句。「一片芳心」、王昌齡『芙蓉楼にて辛漸を送る』「一片の冰心玉壺に在り」を意識するであろう。李煜『蝶恋花』「一片芳心千万緒」。「芳心」の解釈は、33参照。やはり男から女への気持ちととる。「一片」は、本来あなたは私など眼中にもないでしょうに、ほんの少しばかりご厚意をおよせくださって、というような気分か。「初見君」、梅堯臣『雷太簡殿丞に逢う』「長安にて初めて君に見ゆ」。「初君」の名を詠み込んでいるこというまでもない。転句。「情郎」、31既出。結句は、蘇軾『春夜』「花に清香有り月に陰有り」を利用。于武陵『酒を勧む』「花発すれば風雨多し」も念頭にあったろう。「花」「月」は妓女、妓楼の象徴。1参照。「傷」字の使い方、25参照。

本訳注は、

・島根大学法文学部山陰研究センター 2007-8年度 山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト(0701)

代表：蘆田耕一

・2008年度 歴史・文化資源を活かした「地域まるごとミュージアム」化実践プロジェクト(0812)

代表：会下和宏 田中則雄 竹永三男

による成果の一部である。